オープンカレッジ

AIと人間の共生

正しい理解と新たな価値創造

名古屋市立大学
経済学研究科教授
河合　勝彦

AIの進化により「職が奪われるのではないか」という不安が広がっている。この不安を払拭するためには、まずAIの特性を正しく理解する必要がある。AIは高度な計算やパターン認識を得意とし、膨大なデータから素早く答えを導き出せる一方、単純な日常動作や「物を拾って渡す」「複雑な形のものを丁寧に梱包（こんぽう）する」といった作業は依然として苦手としている。とはいえ、人型ロボットの開発が進み、これらの弱点も徐々に克服されつつある。

この「AIや機械（つまりロボット）に仕事が奪われる」という懸念は、技術的な問題というよりも、むしろ収益やコストに関わる課題ともいえる。もしコストが同じで機械のほうが生産性を高められるのであれば、企業は利益を最優先して機械を導入するだろう。ここで忘れてはならないのは、機械と人間それぞれの強みや特性を踏まえた社会設計の必要性である。たとえば、自動運転タクシーの導入によって、人間は長時間運転から解放される一方、高度な車両メンテナンスや配車アルゴリズムの管理といった新たな業務も生まれる。私たちは「奪われる」視点だけでなく、「変化する」という視点で仕事の姿を捉えるべきである。

AIには人間のバイアスを取り除く可能性がある半面、学習データの偏りによる新たなバイアスが生じる点にも注意が必要だ。とりわけAIによる医療診断などでは、その影響が深刻化するおそれがある。また「ハルシネーション（幻覚）」と呼ばれる、事実と異なる情報を生成する現象も指摘されている。しかし、人間も「口からでまかせ」や思い込みで誤った判断をすることがある。重要なのは、私たち自身の判断力を磨き、AIと適切に付き合うスキルを身につけることだろう。

特に「コンピュータに正確に指示を伝え、任せる」スキルは欠かせない。これは新しいリモコンの使い方をマスターするのに似ている。正しい操作で便利に使える一方、誤った操作は思わぬ結果を招くかもしれない。この「使いこなす力」を高めるには、日々の学習だけでなく、人間関係や自然との触れ合いなど多角的に視野を広げることも大切だ。思考が豊かになれば、AIの限界を補ったり新たな可能性を見いだしたりできる。

さらに私たちは、社会システム全体を設計・調整できる「システムアーキテクト」という新たなエッセンシャルワーカーとしての役割を担う必要があるだろう。これはAIと人間がそれぞれの強みを生かして協働できる仕組みを考え、技術・経済・社会の各要素がバランスよく機能する全体像を構想できる人材のことだ。AIが進化する社会では、こうした俯瞰的な視点と調整能力を持った人間の役割がますます重要になる。筆者も社会科学分野の教育を通じて、こうした広い視点を持つ人材を育てたいと考えている。

AIがもたらす変化は脅威だけでなく大きなチャンスでもある。その機会を生かし、人間とAIの共生による新たな価値創造を目指していきたい。

かわい・かつひこ　経営情報システム。テキサス大学オースティン校　Ph.D（Economics）。1964年生まれ。